



カクタス・コミュニケーションズ株式会社
代表取締役 Founder & CEO

アビシェック・ゴエル

(Abhishek Goel)氏

ムンバイ大学在学中に国際NPO法人アイセックのムンバイ代表を務める。語学サポートを目的とした同社を2002年インドで立ち上げ、2007年日本法人設立。

経済発展がめざましく、2025年まで実質GDP6.9%の年率成長が予測されるインド。そんなインドの高等教育をめぐるグローバル化の動きについて、日本の大学の国際支援サービスを手がける、カクタス・コミュニケーションズ株式会社・代表取締役 アビシェック・ゴエル氏に伺った。

——インドの経済発展と高等教育はどのように連動していますか。

インドの経済発展は、多くの富裕層を生み出しましたが、もっとも注目すべきはその人口です。現在世界第2位の約12億人の人口をインドが占め、その可処分所得の中間層数は、アメリカの総人口と

ほぼ等しいのです。

購買力を持つ一大市場ですが、急速な経済発展にインドの伝統的な高等教育機関が追いついていないのが大きな課題です。そのため、高等教育を求めるインドの学生たちの教育は、民間セクターや外国系大学が担っている現状があります。また、経済的に余裕のある学生は、海外留学の道を選択する傾向があります。

——インドの学生の留学の様子を教えてください。

インドからみる 日本の高等教育

カクタス・コミュニケーションズ株式会社

インドでは、25万人以上の学生が2009年に海外へ留学しま

したが、その多くはアメリカで、オーストラリア、イギリスが続きます。

日本は、高いテクノロジーと製造技術がある先進国として、インドでも好印象を与えています。認知度は低く、世界で2番目に英語を話す人口を抱えるインドでは、留学先を選択する際に、日本語という言葉の問題が横たわります。

——インドから日本への留学生数は2009年段階で543人です。

日本の大学も、その価値を英語で世界に発信すれば、海外からより多くの優秀な留学生を集めることが可能になるのではないのでしょうか。海外からの留学生が日本の文化や技術を学び、世界に羽ばたけることは、大学や日本の

産業界にも大きな財産となるでしょう。

あまり知られていませんが、実はインドでは6千人以上が日本語を学んでいます。この事実を見ますと、今よりも多くインドから日本に留学してもおかしくないと思います。

——具体的な方策はありますか。

日本の大学の90%以上の講義は日本語で行われているようです。近年は、グローバル化の進展に伴って英語で学べるコースも増えた印象がありますが、日本語コースを留学生にカリキュラムの一部として提供する必要があるでしょう。留学生への日本語プログラム、そして日本人学生への英語プログラムを提供し、外国人留学生が日本へ滞在しやすく、かつ日本の大学も国際化へ移行しやすい環境になると考えます。

日本の大学が世界標準の教育を提供していることを世界へ積極的に告知すべきです。カリキュラムや学内インフラの整備、英語のクオリティーを上げることで、大学や研究機関が国際化をより進めていけば、優秀な人材が日本に集まり、世界への貢献もさらに果たせると、期待しています。